双葉通信【第 158 回】“電気は東京へ　放射能は福島に”

20221015　上　田　　勉

原発避難の寺はいま　双葉町の光善寺

「いまだ荒廃したままの寺も双葉町にはある。

東京電力福島第一原発から 4km 弱の距離にある光善寺。山門は路側帯を塞ぐように倒れ、境内は雑草や落ち葉で覆われている。本堂の装飾や外壁は落ち、倉裏は数年前に自然倒壊した。住職の藤井賢誠さん（52）は「周りに更地が増え、『取り壊したらどうか』と言われることもあったが、踏ん切りがつかなかった」と話す。

寺は江戸時代末期、門徒の浄財で建てられた。6 年前に 88 歳で亡くなった父で前住職の賢楞（けんりょう）さんが生前「戻る」「戻る」と口にしていた。父らの思い出が詰まる寺を解体するのは名残惜しかったが、年配の門徒から「寺はどうなるのか」と心配する声も多かった。

8 月 30 日の避難指示の解除が決まった頃、今年度中に解体を申請し、数年内に再建することを決めた。

「極楽浄土」を模した浄土真宗の寺内部は金箔（きんぱく）を施すなど装飾が豪華なため、東電の補償では足りそうにない。「何とかやり繰りするしかない」。半分以下のスケールで再建することになりそうだ。

今はいわき市に新築した一軒家の一角を「分院」としている。再建後は双葉と行き来する予定だ。

避難先の門徒を訪ねると、「寺は古里とのつながりを呼び起こす存在なんだ」と感じる。

門徒には、江戸時代の「天明・天保の大飢饉（ききん）」で人口を大きく減らした相馬中村藩に、北陸などから来た移民の末裔（まつえい）が多い。苦労してきた歴史を背負う門徒同士が、兄弟や親せきのように助け、頼り合う風景が見られていた。

法要後に門徒が集まって食事を共にするような風習も残っていた。それが原発事故後はできなくなった。

「会う頻度が減れば、どうしても門徒との関係は薄れてしまう。人の気持ちが離れるのは止められない」。門徒を抜けると告げられる度、「あれだけ絆が深かったのに」と底知れぬ寂しさを感じる。

過疎で緩やかに門徒が減るのは地方の多くの寺が抱える悩みだが、福島では原発事故で一気に散り散りになった。

「前例のない事態をどう乗り切ればいいのか。体力が続く限り門徒に会いに行くつもりだが、どこかで寺を畳む決断をしないといけないかもしれない」と吐露する。

「特定復興再生拠点」には、双葉町の自性院と光善寺を含めて 7 つの寺がある。うち、今夏までに元の場所で再建したのは自性院のみ。2 つは見通しが立っていない。光善寺を含む 4 つは再建する方針だが、自性院と同じで、住職が常駐する予定はいずれもない。」（「朝日新聞」2022 年 10 月 17 日付け）

【震災前の光善寺（双葉町）】寺院・お寺の百龍堂

【上の写真２枚　現在の光善寺（双葉町）】